

# クィア・スタディーズの本邦における受容と課題 —クィア・ペダゴジーの展開に向けて—

## Acceptance and Issues of Queer Studies in Japan: Toward the Development of Queer Pedagogy

坂本 良哉

Yoshiya SAKAMOTO

### はじめに

小論の目的は、クィア・セオリー、あるいはクィア理論 (queer theory)<sup>1)</sup> / クィア・スタディーズ (queer studies) と、セクシュアリティとジェンダーをめぐる研究の出自となった女性学をはじめとする性と生をめぐる学問領域間 / 内の関係から、クィアな視点、すなわち、クィア・スタディーズの問題枠組を検討することである。

「奇妙な」または「普通でない」という意味をもつクィア (queer) という言葉は、英語圏において「変態」、「オカマ」といった侮蔑的な表現として用いられていた (河口 2003: iii; Halperin 2003: 339)。1990年代以降、この侮蔑的な言葉をあえて引き受け、否定的な価値づけの転倒を試みたクィア・セオリーが登場し、クィア・アクティビズムやクィア・スタディーズへと展開し、これらは、ジェンダー / セクシュアリティ研究における性別二元論と異性愛主義を問う意味をもってきた。

このようなクィア・セオリー / クィア・スタディーズの今日的な展開に関わって、セクシュアリティと教育をめぐる施策の動向がある。たとえば、「性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律」(2003)を契機に、文部科学省による通知「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」(2015)があり、その後、教職員に向けた冊子「性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について (教職員向け)」(2016)の公開といった性の多様性の理解・尊重を図る教育施策がある。一方で、2017年に告示された「新学習指導要領」の学習内容において性の多様性に関する記載がないことや、2021年6月16日に「性的指向及び性自認の多様性に関する国民の理解の増進に関する法律案」が国会に提出されず、通常国会が閉会したこと<sup>2)</sup>のように、先の積極的な姿勢とは相反する動きがみられる。

この大きな変化の中にあり、多くの課題を抱えるセクシュアリティと教育に関して、クィア・ペダゴジー (queer pedagogy) への着目がある (永田 2020; 眞野 2020; マリィ 2008; 森山 2009, 2018; 山口・田口・松本・関根 2011; 渡辺 2015, 2019)。これらの研究において、クィア・ペダゴジーは、クィア・セオリー / クィア・スタディーズと教育の遭

遇にて生じる問題系 (森山 2009: 50) やヘテロノーマティブな教育、すなわち、異性愛主義にもとづく教育を再考するもの (渡辺 2019: 142) と説明される。

しかし、セクシュアリティと教育に関する諸問題は、同性愛／異性愛といった性的指向をめぐるものだけではない。そのため、多様なセクシュアリティに開かれた教育に向かうには、教育における異性愛主義を再考することだけでは十分でない。そのようにクィア・セオリー／クィア・スタディーズにおけるクィアな視点の意義を異性愛主義の問いなおしに留めることは、その意義を十分に掬いきれておらず、性別二元論との関係やそれ自体の問いなおしを見落としているのではなかろうか。このような課題は、クィア・セオリー／クィア・スタディーズ、とりわけ、それらの本邦における受容の仕方に端を発するのではなかろうか。

このような問題関心から、小論ではクィア・ペダゴジーの検討に向けて、その理論的基盤であるクィア・セオリー、またクィア・ペダゴジーと理論的基盤を共有するクィア・スタディーズがどのように本邦に受容されたのかを整理し、現行のクィアな視点をもつ課題と未発の可能性としての意義について検討する。具体的に、まず「クィア」を冠する本邦の刊行物を概観し、クィア・セオリー／クィア・スタディーズの現行の捉えられ方から、そこにおける性別二元論の見落としを指摘する。つぎに、その課題と近接するジェンダー／セクシュアリティ研究と「クィア」との関係を検討し、これらを踏まえ、現行のクィア・セオリー／クィア・スタディーズを乗り越えるクィアな視点の意義を検討する。

## 1 クィア・セオリー／クィア・スタディーズの整理

本邦におけるクィア・セオリー／クィア・スタディーズの動向を、「クィア」をめぐる刊行物から検討する。

### 1.1 「クィア」の受容と定着

クィア・セオリー／クィア・スタディーズの前史にあたるレズビアン・スタディーズ、ゲイ・スタディーズに関する本邦における初期の刊行物は、それぞれのアイデンティティの立場から、社会への異議申し立てを推し進めた掛札悠子『「レズビアン」である、ということ』(1992)、キース・ヴィンセント／風間孝／河口和也『ゲイ・スタディーズ』(1997)が挙げられる<sup>3)</sup>。これらはアクティビズムと密接な立場から書かれており、前者は、掛札によるレズビアン・コミュニティ内外への働きかけの中に位置づけられる。後者では、かれらが関わる団体である「OCCUR (アカー)」（正式名称は「動くゲイとレズビアンの会」)の実践が紹介され、また同団体による『実践するセクシュアリティ—同性愛／異性愛の政治学』(1998)でも、「レズビアン／ゲイ・アクティビズム」について取り上げられる<sup>4)</sup>。

本邦における「クィア」と冠した刊行物も、アクティビズムの流れの中にもみることができる。たとえば、伏見憲明は、性をめぐる議論や運動の「共通の土俵」として「クィア」を掲げ (伏見・野口 2004: 24)、対談集である『クィア・パラダイス——「性」の迷宮

へようこそ 伏見憲明対談集』(1996)<sup>5)</sup>をはじめとして、クィア・スタディーズ編集委員会『クィア・スタディーズ'96』(1996)、『クィア・スタディーズ'97』(1997)における論考発表、雑誌『Queer Japan Vol.1-5』(1999-2001)、『Queer Japan returns Vol.0-2』(2005-2006)の編集など、ゲイ・アクティビズムを牽引してきた。また、このようなアクティビズムの展開を背景としながら、神経解剖学の立場から同性愛者をめぐる科学言説を検討するサイモン・ルベイ(伏見憲明監修・玉野真路・岡田太郎訳)『クィア・サイエンス——同性愛をめぐる科学言説の変遷』(2002)を監修した。

このルベイの書籍を含め、2000年代に限定しても、よりアカデミックな刊行物として、社会学の領域から、英語圏におけるクィア・スタディーズをそれ以前の文脈から整理する河口『クィア・スタディーズ』(2003)、ポストモダンの文脈から論ずるタムシン・スパーゴ(吉村育子訳)『フーコーとクィア理論』(2004)の翻訳出版、文学批評の領域から、英米文学を扱った藤森かよこ編『クィア批評』(2005)、村山敏勝『(見えない)欲望へ向けて——クィア批評との対話』(2005)、人文科学的な性科学の立場から性と生を問いなおす中村美亜『クィア・セクソロジー——性の思いこみを解きほぐす』(2008)とそれぞれの学問領域において「クィア」が用いられた<sup>6)</sup>。

とりわけ、河口の『クィア・スタディーズ』は、これまでアクティビズムの文脈で議論されてきたクィア・セオリーを学問体系として示し、本邦のクィア・セオリー／クィア・スタディーズに大きな影響を与えている。以下では、同書にもとづきながら、本邦におけるクィア・セオリー／クィア・スタディーズの展開をあとづける。

## 1.2 クィア・セオリーの提起

クィア・セオリーは、1990年2月にテレサ・ド・ローレティス(Teresa de Lauretis)<sup>7)</sup>が主催した研究会議にて提起された。翌年、同会議にて報告されたローレティスの「Queer Theory.: Lesbian and Gay Sexualities; An Introduction」が雑誌『ディファレンシズ』に掲載され、その後、同論文は1996年に日本語に翻訳されて『ユリイカ』に掲載された。このローレティスによる提起は、クィア・セオリーの目的を示す主要な主張として共有されている。

河口は、ローレティスのクィア・セオリーによって提起される問題を、「レズビアンとゲイ」という括りの中の差異やそれぞれのセクシュアル・アイデンティティ内での差異が抹消されること、人種とセクシュアリティとの関係に目を向けること、従来のレズビアンやゲイをめぐる研究が既存の学問的枠組や体系に規定されていることの3点に整理する(河口2003: 58-9)。

この3点に即せば、クィア・セオリーは第一に、1990年初頭におけるレズビアンとゲイの連帯は「いつも前提にされ、つくりあげようとはされてこなかった」というローレティスの問題意識を受け、「連帯をする前に、それぞれお互いが何であり、いやそれぞれ複数のアイデンティティとは何であるかについて考える」ことが必要である(ラウレティスほか1998: 72)。第二に、「人種の違いからくる自己表象とアイデンティティにおける差異」に着目し、「レズビアン／ゲイのセクシュアリティをめぐる最近の言説の有用性と／あるいは限界を検証し、問いなおし、それに異議を唱える」ものである(ローレティス1996: 73)。第三に、密接であった学問領域がレズビアンとゲイで異なること

から、「セクシュアリティの言説は男女で大きく異な」とし、既存の学問領域を横断したり、問いなおしたりすることが必要である (ラウレティスほか 1998: 68)。

### 1.3 クィア・スタディーズへの展開

ローレティスの提起を契機に、クィア・スタディーズという研究領域が形成されてきた。本邦においては、2007年にクィア学会が設立し、クィア・スタディーズをめぐる議論が積まれた<sup>8)</sup>。

英語圏では、多くのクィア・セオリーをめぐる論考があり、代表的な論者として、文学研究者であるイヴ・コゾフスキィ・セジウィック (Eve Kosofsky Sedgwick) が挙げられる。セジウィックは、著書『男同士の絆——イギリス文学とホモソーシャルな欲望』において、男と男の社会的な結びつきにおける「エロティックな特性」をみいだす「ホモソーシャル」概念により同性愛／異性愛の二元論的な関係性を問いなおした (セジウィック 2001: 24)。その後も、セジウィックは、「一人の人間の性器行動を、他の人間の性器行動と区別するには、きわめて多くの次元での区別があり得る」とし、人間を同性愛／異性愛とする二元論を批判した (セジウィック 2018: 17)。

河口は、このようなセジウィックによるクィア・セオリーの展開から、「異性愛／同性愛の二元論的思考方によって排除されてしまう両性愛やトランスセクシュアリティに対する視点を含めるような非二元論的思考」を特徴として取りあげ、「多様なセクシュアリティのあり方」に焦点を当てられる理論であると述べた (河口 2018: 203)。

確かに、クィア・スタディーズは、そもそもその定義に消極的であるが (釜野 2011: 25; 河口 2010: 196; 森山 2017: 126)、「クィア」やクィア・スタディーズとしてしか表現しえない学問のありようから、その可能性の追求は行われてきた。それらを踏まえて、以下ではクィア・スタディーズを、2000年代後半の研究動向を示した河口 (2010) と「入門書」を謳う森山至貴『LGBTを読みとく——クィア・スタディーズ入門』(2017)の整理から確認する。

河口は、多くのクィア・スタディーズの共通項として「異性愛体制に懐疑を投げかけ、それを解体の方向に向かわせるような理論的実践」(河口 2010: 196)であることを挙げ、クィア・スタディーズはヘテロノーマティヴィティ (異性愛規範性) を問題とすることを特徴とした (河口 2010: 205)。一方で、森山はクィア・スタディーズが共有する特徴として、「差異に基づく連帯の志向」、「否定的な価値づけの積極的な引き受けによる価値転倒」、「アイデンティティの両義性や流動性に対する着目」を挙げる (森山 2017: 125-7)。

両者のクィア・スタディーズへの理解は、河口が異性愛主義といった同性愛／異性愛をめぐる諸問題を主に扱うのに対して、森山はそれを超えあらゆる性をめぐる規範を問いなおそうとする点で異なっている。さらに、直近のクィア・スタディーズにおいては、河口の姿勢が引き継がれている。菊地夏野・堀江有里・飯野由里子は、『クィア・スタディーズをひらく1——アイデンティティ, コミュニティ, スペース』における「クィア・スタディーズとは何か」にて、クィア・スタディーズを『『異性愛』的でない」とされる人々の生や経験、彼女彼らによって行われてきたさまざまな言説実践に関する研究と、そうした研究の蓄積を通して培われてきた独自の理論的なスタンスから行

われる社会・文化批評の両方を含む、幅広い学問領域」と述べる（菊地ほか 2019: 4）。

これらのことより、本邦におけるクィア・スタディーズは、クィア・セオリーの射程でありえた「両性愛やトランスセクシュアリティ」といった「多様なセクシュアリティのあり方」を見落とし（河口 2018: 203）、ジェンダー／セクシュアリティの文脈に限定したとしても、同性愛／異性愛をめぐる諸問題へのアプローチに留まっている。

## 2 「クィア」を取り巻くジェンダー／セクシュアリティ研究との関係

このようなアプローチの限界は何に由来するのだろうか。以下では、レズビアン／ゲイ・スタディーズや女性学、さらにトランスジェンダー・スタディーズとの関係から検討する。

### 2.1 レズビアン／ゲイ・スタディーズへの引き寄せ

『岩波 女性学事典』によれば、レズビアン・スタディーズは、ホモフォビアとミソジニーに対抗することを目的とした「レズビアンの視点から構築される」研究であり（富岡 2002: 840）、ゲイ・スタディーズは、ホモフォビアに対抗することを目的とした「ゲイが主体となったゲイに関する研究」である（河口 2002: 106）。

クィア・セオリーを提起したローレティスの問題意識は、先に述べたように 1990 年代のアメリカにおけるレズビアン／ゲイ・スタディーズに対するものであり、レズビアンやゲイという一貫性のあるアイデンティティの確立を重視し、それらのアイデンティティを同一視することに懐疑的であった。

このローレティスの主張は、『ユリイカ』における「特集 クィア・リーディング」にて、本邦に紹介された。同特集では、「クィア」を文学批評の文脈で論ずる大橋洋一や竹村和子とならび、日本文学の研究者としてヴィンセントがゲイ・アクティビズムやゲイ・スタディーズの文脈で論ずる。そして、ヴィンセントとともに OCCUR にて活動する風間、河口が「クィア」について議論していく。そのため、本邦におけるクィア・セオリーの紹介は、レズビアン／ゲイ・スタディーズ、とりわけ、ゲイ・スタディーズ<sup>9)</sup>が主導することとなる<sup>10)</sup>。

以下では、本邦におけるゲイ・スタディーズの研究者であり、その文脈においてクィア・セオリーを紹介し、検討するヴィンセント、風間、河口の言説を取り上げる。ヴィンセントと新美広<sup>11)</sup>は、ローレティスに対するインタビューでの聞き手として、次のように述べる。

いま、私たちは『ゲイ・スタディーズ』という本と『現代思想』という雑誌の臨時増刊号「レズビアン／ゲイ・スタディーズ」という特集の執筆と編集に携わっています。そこでは、それはクィア・セオリーを日本の文脈で消化し、分析することを試みています。（ラウレティスほか 1998: 67）

ヴィンセントと新美は、同インタビューを振り返り、「遅まきながら（いや、これま

でレズビアン／ゲイの言説が沈黙を強いられてきた時間の長さを考えるとあまりにも早く) クィア理論が跋扈しようとしている」本邦の状況への警告となったと述べる (ラウレティスほか 1998: 66)。その背景には、本邦のゲイ・スタディーズが、レズビアンやゲイのアイデンティティが確立していない中では、「クィア」は「人が自分の問題やアイデンティティを曖昧化するために、その問題に直面しないために」、「安全なごまかしを提供」するという考えをもっていたことが挙げられる (ラウレティスほか 1998: 69)。

そのため、本邦のゲイ・スタディーズは、アイデンティティの確立を重視し、クィア・セオリーをレズビアン／ゲイのための理論として紹介してきた。風間は、クィア・セオリーは「ゲイとレズビアンが自分たちのために作った理論」であるとし、「自分たちが解放されていくための理論」となるためにアイデンティティの確立は不可欠と指摘する (風間 1997: 32)。また、ヴィンセントは、『現代思想』における「総特集 レズビアン／ゲイ・スタディーズ」にて、クィア・セオリーは、「誰が、誰のために伝えようとしているのか (傍点原著者)」が重要であるとし、それは、同性愛者と「同性愛者とアイデンティファイしようとする努力している人たち」が、「私たちの愛する者のため」の理論であると述べる (ヴィンセント 1997: 17)。そして、ヴィンセント・風間・河口は、『ゲイ・スタディーズ』にて、ローレティスのクィア・セオリーを「同性愛嫌悪や異性愛主義に対して闘うための」ものとした (ヴィンセントほか 1997: 38)。

このようなゲイ・スタディーズによるクィア・セオリーの紹介によって、本邦におけるクィア・スタディーズは、レズビアン／ゲイ (とりわけ、ゲイ・スタディーズの文脈として) の問題、また同性愛／異性愛の問題に対する研究と位置づけられた<sup>12)</sup>。

## 2.2 女性学との認識の違い

ローレティスのクィア・セオリーは、セクシュアリティとジェンダーとの関係に目を向けることを重視する。クィア・セオリーの研究者である伊野真一は、「セックスとジェンダーとセクシュアリティは、それぞれ峻別されるべき分析軸でありながら、三者は密接にかかわっている」(伊野 2001: 199) とし、「ジェンダーとセクシュアリティを相互に連関させる分析がクィア理論の真骨頂」(伊野 2005: 69) と述べる。

一方で、同様にセクシュアリティとジェンダーをめぐる研究であり、そのような学問領域の出自となってきた女性学は、『岩波 女性学事典』によれば「男性中心主義的な知を批判し、女性の経験の言語化・理論化と性差別の構造解明を目的とする」ものである (井上 2002: 211)。このように定義される女性学は、『女性学』における「特集 バックラッシュをクィアする——性別二分法批判の視点から」にて、クィア・セオリー／クィア・スタディーズとの関係を議論した。同特集の背景には、1990年代初頭からみられる性教育に対するバッシングや2000年代からみられる男女共同参画政策に対するバックラッシュ、および、それらへの女性学の対抗がある。その対抗言説は、性別二元論と異性愛主義に親和的であったことから、女性学が抱える課題を浮き彫りにした。飯野は、その要点として、バックラッシュ派の「フェミニズムは、男らしさ／女らしさを否定するものだ」、「ジェンダー・フリー、フェミニズムは、中性人間をつくらうとしている」という批判に対する言説が、性別二元論を前提とし、ホモフォビアやトランスフォビアを見過ごすものであったとまとめる (飯野 2020: 85-6)。

このような状況において、これまでバックラッシュに関する大会シンポジウム（2003）の開催や書籍（日本女性学会ジェンダー研究会 2006）<sup>13)</sup>の出版を行ってきた日本女性学会は、バックラッシュをクィア・スタディーズの視点から再検討するために、大会シンポジウム（2007）ならびに同特集を企画した。しかし、本企画の提案者の1人である風間は、同企画に「多くの期待が寄せられたが、それに必ずしも応えることができなかった」と述べ、その理由を考察する（風間 2008: 4）。

風間は、シンポジウムの目的であるセクシュアリティとジェンダーとの関係に目を向け、「性別二分法（二元制）と異性愛主義を克服していく」ことに対する齟齬を生んだとし（風間 2008: 5-6）、それはシンポジウム内でクィアとセクシュアリティという言葉の認識が共有されていなかったためであると指摘する。

このクィアという言葉の用法として、動詞と名詞の2つの意味があることが挙げられる（風間 2008: 6）。つまり、あらゆる性をめぐる規範を問いなおす意味である動詞としてのクィアとセクシュアル・マイノリティを指す名詞としてのクィアが存在する。

クィアを名詞として用いる場合には、女性学の担い手とクィア・スタディーズの担い手の間に境界線が引かれる可能性がある。シンポジウムに参加した田中玲は、FTM トランスジェンダーである自身のドメスティック・バイオレンスの経験の話に対する、日本女性学会員による「優先順位が違う」との発言から、「ヘテロセクシュアル女性の方がクィア（レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー、インターセックスの総称）より優先順位が高い」という考えがあることを指摘する（田中 2008: 46）。このように、名詞としてのクィアという認識は、セックスとジェンダーとセクシュアリティによって、女性学を担える「女」である者とそうでない者、クィア・スタディーズを担えるクィア（セクシュアル・マイノリティ）である者とそうでない者といった線引きがなされることで、性別二元論と異性愛主義との関係を問う動詞としてのクィアとの認識に齟齬が生まれる。

次に、セクシュアリティという言葉の認識として、風間は、「異性間に収斂されない、同性間を含んだ性欲望および性実践」を意図したと述べる。一方で、女性学では、「ジェンダーに依拠して作り出された公的領域の不平等に対して、私的領域における不平等を指し示す」言葉として用いられてきたと述べる（風間 2008: 6-7）。後者の認識にもとづくセクシュアリティは、ヘテロセクシュアルを前提とし、ホモセクシュアルをめぐる課題を捉えることが困難となる。そのため、風間は、「セクシュアリティ」概念の「再整理の試み」が必要と述べる（風間 2008: 7）。

このように、クィア・スタディーズをめぐる概念には、認識の違いが存在している。菊地・堀江・飯野は、「人々を特定のあり方・生き方に方向づける強制的な仕組み・制度」として異性愛を捉え、それを構成する要素として、性別二元論、ジェンダーの二元論的な区分、恋愛や婚姻、リプロダクションや身体、労働規範、文化実践、社会制度を挙げている（菊地ほか 2019: 5）。しかし、その前提となる認識を丁寧に整理しなければ、セクシュアリティとジェンダーとの関係を捉えられず、性別二元論と異性愛主義の結びつきを問いなおすことができない<sup>14)</sup>。それでは、女性学とクィア・スタディーズは、ともに閉ざされたものとなる。

### 2.3 トランスジェンダー・スタディーズによる拓き

前節にて、女性学において、「クィア」、とりわけトランスジェンダーが排除されることを田中 (2008) の論考からみた。そこには、女性学がセクシュアリティとジェンダーとの関係を捉えきれていないことがあった (風間 2008)。

一方で、『セクシュアリティ基本用語事典』によれば、トランスジェンダー・スタディーズは、「Trans studies トランス・スタディーズ」の項目において「トランスの人びとの経験に焦点を合わせた」研究と定義される (ウェイス 2006: 312)。そのようなトランスジェンダー・スタディーズの研究者であるゲイル・サラモン (Gayle Salamon) は、『身体を引き受ける——トランスジェンダーと物質性 (マテリアリティ) のレトリック』にて、女性学やクィア・セオリー、トランスジェンダー・スタディーズといったさまざまな学問領域を横断した検討を行う。同書では、田中 (2008) と同様に、女性学がトランスジェンダーを捉えられていないこと、さらにクィア・スタディーズもトランスジェンダーを捉えられていないことを指摘する。トランスジェンダーとクィア・セオリーとの関係を論じた田多井俊喜は、クィア・セオリーは、生物学的性にもとづく二元論による性差を権力関係が内包されているものと認識し、それを積極的に解体しようとするものと理解する。そのため、生物学的性にこだわることは権力関係に巻き込まれることという認識によって、トランスジェンダーは性別二元論による性差、すなわち、女と男という差異を再生産する存在という見解につながりやすいとする。そして、「生物学的性差に執着する意思を批判的に検証するところに、クィア理論がクィア理論たる理由がある」とし、生物学的性にこだわるトランスジェンダーの意思は、「クィア理論の範疇を超えている」と結論づける (田多井 2018: 59-60)。

田多井が主張するように、トランスジェンダーの視点をクィア・スタディーズはどのようにも引き取りえないのか。以下では、サラモン (2019) の論考と藤高和輝 (2019) による「訳者解説」にもとづき、クィア・スタディーズとトランスジェンダー・スタディーズとの関係をみる<sup>15)</sup>。1990年代中頃、クィア・セオリー／クィア・スタディーズは、トランスジェンダーの課題にアプローチできるとして期待されていた。サラモンは、クィア・セオリー／クィア・スタディーズは、セクシュアリティとジェンダーの問題を区別できておらず、トランスジェンダーを誤って捉えていると指摘する。この理由として、「クィア」がレズビアン／ゲイを指す言葉として認識され、それらと同様にトランスジェンダーの課題をセクシュアリティの問題として捉えていることが挙げられる (サラモン 2019: 160-8)。

これを受けて、藤高は、昨今のLGBT運動では、「ジェンダーの問題がセクシュアリティの問題にいつの間にかすり替えられ」、トランスジェンダーが不可視化、周縁化されていると指摘する。また、このような状況は、レズビアンやゲイは「ジェンダー規範的主体」とみなされるのに対し、トランスジェンダーは「ジェンダー侵犯的主体」とみなされ、「クィア」の中で序列が生じることになると危惧する (藤高 2019: 351)。そして、ローレティスの「連帯をする前に、それぞれお互いが何であり、いやそれぞれ複数のアイデンティティとは何であるかについて考える」(ラウレティスほか 1998: 72) という問題意識に立ち戻るべきだと述べる。このように、トランスジェンダーは、クィア・セオリー／クィア・スタディーズにおいても女性学においても「優先順位」が低くみられ、



十分でかつ適切なアプローチがなされていない。

この状況は、性別二元論と異性愛主義が存在する社会で、実際に生きている／きた経験であるトランスジェンダー・スタディーズの知見から、ジェンダーとセクシュアリティとの関係、つまり、性別二元論と異性愛主義の結びつきやそれら自体を問いなおすことで乗り越えられるのではないか。田中は、『性別』という強固なものの境界線の上に立ち続ける」存在であるトランスジェンダーに可能性を抱く（田中 2006: 156）。また、サラモンは、「男女の二元論を超えたジェンダーは虚構でも未来形でもなく、目下、身体化され、生きられている」（サラモン 2019: 152）とし、トランスジェンダーの身体の「感じられ方」に着目する（藤高 2020: 124）。

このようなトランスジェンダーの経験は、性別二元論を支えているかのようにみられるが、私たちはそれ自体をトランスする存在、すなわち、クィアする存在としてみることができ。クィア・セオリーによってトランスジェンダーの身体をめぐる経験について論じた清水晶子は、生物学的性にもとづく差異は必ず「視認可能な形で現れ」という幻想を否定し、「埋没した差異」に着目する（清水 2020a: 46）。この視点は、トランスジェンダーのクィアな経験を捉える。そのため、トランスジェンダーの経験を含むトランスジェンダー・スタディーズによって鍛えられることでこそ、クィア・セオリー／クィア・スタディーズがあらゆる性をめぐる規範を問いなおすことができ、新たな性に関する思考の理路が拓ける。

### 3 クィアな視点の課題と可能性

ここまでのまとめからクィアな視点の課題やそれを乗り越えるクィアな視点を検討する。

#### 3.1 性別二元論を超える「当事者」の拡大

本邦におけるクィア・セオリー／クィア・スタディーズは、異性愛主義の問いなおしに留まり、性別二元論との関係やそれ自体の問いなおしを見落としている。それは、前章にて検討したレズビアン／ゲイ・スタディーズや女性学、さらにトランスジェンダー・スタディーズとの関係からみることができる。

レズビアン／ゲイ・スタディーズとの関係からは、運動や研究を担う「当事者」を重視するゲイ・スタディーズによって、クィア・セオリーがレズビアン／ゲイのための理論として紹介され、異性愛主義を問いなおす理論として受け取られたことがわかる。この姿勢は、直近のクィア・スタディーズにおいても引き継がれている（菊地ほか 2019）。また、女性学との関係からは、クィアという言葉がセクシュアル・マイノリティを指すものとして認識され、女性学における「女」を問いなおせず、クィアな人たちが見落とされていることがわかる<sup>16)</sup>。そこには、セクシュアリティをめぐる概念の認識が共有されておらず、異性愛主義や性別二元論を問いなおせていないことがみられる。

このような「当事者」を重視する背景には、マジョリティによってマイノリティ像が語られ、マイノリティが「自らの『口』を持ってなかった」（ヴィンセント 1997:10）こ

とが挙げられる。しかし、それはそれぞれの運動や研究を担う「当事者」のあり方を固定化する側面がある。そのため、多様なあり方をあらかじめ「当事者」の枠から締め出すことなく、それまでのジェンダー／セクシュアリティをめぐるアイデンティティの括りを超える開かれた視点を検討しなければならない(清水 2020b: 119)。このような視点は、レズビアン／ゲイ・スタディーズや女性学の問題枠組を鍛え、それらが見出してきた知見を未発の可能性へと押し広げる。

しかし、トランスジェンダー・スタディーズとの関係からは、トランスジェンダーの課題がセクシュアリティの問題として捉えられることで、トランスジェンダーが不可視化、周縁化されていることがわかる。その背景には、「クィア」がレズビアン／ゲイを指す言葉として認識されていることで、クィア・セオリー／クィア・スタディーズが、レズビアン／ゲイ・スタディーズや女性学との関係からみえた課題と同様の状態に陥っていることが挙げられる。これは、性別二元論と異性愛主義が存在する社会で、実際に生きている／きた経験であるトランスジェンダー・スタディーズの知見によって鍛えられることで乗り越えられ、それは新たな性に関する思考の理路へと拓かせる。

そして、クィア・セオリー／クィア・スタディーズは、ローレティスが主張するセクシュアリティとジェンダーとの関係である異性愛主義と性別二元論の結びつきやそれら自体を問いなおすために、「連帯をする前に、それぞれお互いが何であり、いやそれぞれ複数のアイデンティティとは何であるかについて考える」(ラウレティスほか 1998: 72)という問題意識に、常に立ち戻り続けなければならない。

この問題意識への立ち戻りは、クィア・ペダゴジーにおいても要請される。それが主眼とするセクシュアリティと教育に関わって「性の多様性」教育とまとめられる実践があり(堀川・富永 2019: 124-5)、主に学校教育において積み重ねられている<sup>17)</sup>。これらの内容は家族や同性愛という視点から異性愛主義を問いなおすものであり、クィア・ペダゴジーでは、それと性別二元論の結びつきやトランスジェンダーの経験を含んだ検討が求められよう。

### 3.2 鍛えなおしは終わらない

前節におけるローレティスの問題意識への立ち戻りは、あらゆる性をめぐる規範を問いなおすクィアな視点を必要とする。その視点は、現行のクィア・セオリー／クィア・スタディーズに向けられ続ける。これまで、クィア・スタディーズの検討では、クィア・セオリー／クィア・スタディーズが提起される以前のセクシュアリティをめぐる文脈が注視されてきた<sup>18)</sup>。それとならび、現行のクィア・セオリー／クィア・スタディーズのあらゆる言説を問い、そこにある安定性を揺るがすことが必要不可欠である(飯野 2008: 82)。それは、クィア・セオリー／クィア・スタディーズを含むジェンダー／セクシュアリティ研究に存在する緊張関係を明らかにし、それぞれの学問領域における問題枠組や姿勢を問いなおすことで、新たな関係性を生み出す。

このようなクィアな視点は、性をめぐる規範が存在する社会に生きるすべての人のために開かれていなければならない。たとえば、『現代思想』における「特集〈恋愛〉の現在」では、これまで語られてこなかった性をめぐる規範がさまざまなセクシュアル・アイデンティティの視座から問いなおされる<sup>19)</sup>。その視座に立てる者か否かという境界

線はなく、もちろん、そこにおいてはセクシュアル・マイノリティとそれをめぐるマジョリティによる線引きもなされない<sup>20)</sup>。むしろ両者が連帯する可能性が模索される<sup>21)</sup>。語り合い、連帯を図ろうとするそれは、恋愛という概念が回収されがちな、ポストフェミニズム的な個人化を超えたものである。

そのためには、規範を問いなおすクィアな視点を持ち続け、またそれがクィア・セオリー／クィア・スタディーズ自体やそれを取り巻く研究から鍛えられ続ける必要がある。そのような営みは、異性愛主義だけでなく性別二元論とも向き合うことのできる理論構築の可能性を示すものであり、この社会に生きる多様なセクシュアリティの決して単純ではない関係性を明らかにし、その上で連帯する方法を模索するものである。その連帯のあり方は、河口が述べる「非異性愛者による」(河口 2003: iv) 連帯ではなく、「クィアな」連帯ではなかろうか。

## おわりに

小論の目的は、クィア・セオリー／クィア・スタディーズとそれを取り巻くジェンダー／セクシュアリティ研究との関係から、そこにみえる課題とそれを乗り越えるクィアな視点を検討することであった。

本邦におけるクィア・セオリー／クィア・スタディーズは、異性愛主義の問いなおしに留まり、性別二元論との関係やそれ自体を問いなおす視点を見落としている。そのような現行のクィアな視点は、トランスジェンダーの経験を含むトランスジェンダー・スタディーズによって鍛えられることで未発の可能性へと拓かれる。さらに、クィア・セオリー／クィア・スタディーズは、性別二元論に限らず、性をめぐる諸規範を問いなおし続ける必要がある。そのためには、クィア・セオリー／クィア・スタディーズを含むジェンダー／セクシュアリティ研究の問題枠組や姿勢を問いなおし、それぞれの学問領域間／内から鍛えられ続けなければならない。このようなクィアな視点は、すべての性に開かれた理論構築に向かわせる。

小論は本邦における文献検討に限定しているため、「クィア」をめぐる議論が活発である英語圏の文献を含んだものではない。たとえば、クィア理論の研究者であるサラ・アーメッド (Sara Ahmed) は、女性学とトランスジェンダー・スタディーズの緊張関係に対して、規範によって生きづらさを抱える人たちが、その規範への抵抗を通じて連帯することができる「類縁性のハンマー」(Ahmed 2016) を主張している。このような主張を、本邦における「クィア」をめぐる状況をもとに検討することが、今後の課題として挙げられる。

一方で、クィアな視点は教育に存在する課題といかに向き合うのだろうか。ジェンダー／セクシュアリティをめぐる教育の場は「現行の規範に依る、あるいは現行の規範に抗う行為とそれに対する解釈が、さまざまにもち込まれ、それらがせめぎあうアリーナである」(富永 2015: 193)。そのアリーナにもち込まれる課題は、早急に解決できるものではないし、それを早急に解決しようとしてはならない。清水は、クィア・セオリーの可能性として、存在する課題に対して「解決せずに、むしろ、にもかかわらずきしみが

ある、断裂がある、あるいは対立があるということ、を、自覚的に維持していくこと」を挙げる (清水 2019: 21-2)。さまざまな緊張関係を単純化することなく、丁寧に掬いあげるクィアな視点による検討を試み、クィアな場としての教育を示すことに、クィア・ペダゴジーの意義があるのではなかろうか。

## 註

- 1) クィア・セオリーは、論者によってクィア理論と表記されるが、小論ではクィア・セオリーと表記を統一する。しかし、引用文中はその限りでない。
- 2) 神田安積, 2021.06.16, 「性的指向及び性自認に関する差別を防止・禁止する立法を求める会長声明」 ([https://niben.jp/news/news\\_pdf/opinion20210316.pdf](https://niben.jp/news/news_pdf/opinion20210316.pdf), 最終閲覧日 2021年9月14日) を参照のこと。
- 3) なお、2000年代までに出版され、レズビアン・スタディーズ、ゲイ・スタディーズを取り扱った雑誌として、『imago』における「特集 レズビアン」(1991)、「特集 ゲイ・リベレーション」(1995)、『現代思想』における「総特集 レズビアン／ゲイ・スタディーズ」(1997)がある。また、セクシュアリティをめぐる『imago』における「特集 異常性愛」(1990)、「特集 セクシュアリティ」(1998)や『ユリイカ』における「特集 ポリセクシュアル」(1998)、『現代思想』における「特集 ジェンダー・スタディーズ」(1999)が挙げられる。
- 4) また、ゲイ・スタディーズの文脈から、90年代のアメリカにおけるクィア・アクティビズムを描いたミケランジェロ・シニョリレ (川崎浩利訳) 『クィア・イン・アメリカ——メディア、権力、ゲイ・パワー』(1997)が翻訳出版された。
- 5) 後に、同書は『変態 (クィア) 入門』(2003)として文庫本化されている。
- 6) なお、英語圏における代表的なクィア・セオリーが『批評空間 2期 No.8』(1996)にて紹介されている。また、2000年代中頃からクィア・セオリーが竹村和子編『“ポスト”フェミニズム』(2003)や雑誌『大航海 No.43』(2002)、『ジェンダー史学 Vol.1-2』(2005,2006)、『解放教育 Vol.38 No.1』(2008)において議論された (大橋 2002,2003,2005; 加藤 2008; 星乃 2006)。
- 7) ローレティスの表記は、テレサ・ド・ローレティスやテレサ・デ・ラウレティスと揺れがある。小論では、『ユリイカ』における表記にならば、テレサ・ド・ローレティスに統一する。しかし、文献の1つにテレサ・デ・ラウレティス表記のものがあり、同文献を示す割注に関しては、(ラウレティスほか 1998: 引用ページ数)と表記した。
- 8) クィア学会は、2008年から2014年まで学会誌『論叢クィア』を発行し、クィア・スタディーズをめぐる論考が掲載された。また、2015年から2021年9月現在までは、無期限の休止状態である。
- 9) ここにおけるゲイ・スタディーズは、1990年代以降のゲイの「当事者」を扱った学問を指す (川坂 2010: 87)。代表的な研究者として、本文に挙げるヴィンセント、風間、河口がいる。

- 10) その背景には、レズビアンとゲイにおけるジェンダーによる差異がある。前川直哉は、「同性愛」と冠する書籍（伏見 2003a; 風間・河口 2010）において、男性同性愛に関する記述が中心であり、女性同性愛に関する記述がほとんどないことから、男性同性愛が同性愛全体を代表し、女性同性愛が不可視化されてきたことを指摘する（前川 2019: 81-2）。
- 11) 新美は、OCCUR の代表理事であり、同団体は本邦における同性愛者の人権保障をめぐる活動を行っている。
- 12) このようなクィア・セオリーの捉え方に対して、伊野は「クィア・スタディーズとは、ある特殊な人々のための特殊な研究」ではないと批判し、クィア・セオリー／クィア・スタディーズの射程の広さを論じた（伊野 1997: 117）。
- 13) 日本女性学会内部にて発足された同会は、2005 年に本書作成に向けて設立された。
- 14) 川坂は、菊地・堀江・飯野編の書籍に対して「トランスジェンダーの視点からコミュニティをめぐる論考が」欠落していることから、「アイデンティティをめぐる諸論考は、同性愛者の問題に偏りすぎて」といると指摘する（川坂 2019: 85）。
- 15) 藤高は、「トランスジェンダー・スタディーズという学問分野（人文学や社会科学における）は本邦においてはまだ影も形もないのが現状である」と述べる（藤高 2019: 343）。そのため、ここでは、日本語に翻訳されたトランスジェンダー・スタディーズを扱うサラモンの書籍とトランスジェンダーに関する研究から検討する。
- 16) 近年において、Twitter をはじめとするネット空間にて、『『フェミニスト』を自認するユーザーたち』による「トランスジェンダーの人々に対する差別的攻撃的な発言」（本山 2019: 4-5）が目立つことを受け、『女たちの 21 世紀』における『特集 フェミニズムとトランス排除』にて、改めて女性学におけるトランスフォビアが議論された（飯野 2019; 尾崎 2019; 堀 2019; 三橋 2019）。
- 17) たとえば、先駆的な教育実践と位置づけられている吉田和子（1997）や坂田和子（2001）、教育実践研究である渡辺大輔・楠裕子・田代美江子・長香織（2011）、田代美江子・渡辺大輔・長香織（2014）が挙げられる。それらの具体的な検討は別稿にて行う。
- 18) 河口（2003）は、2 部構成であり、1 部に第 1 章「レズビアン／ゲイ・スタディーズ前史」と第 2 章「レズビアン／ゲイ・スタディーズ」を置く。森山（2017）は、8 章構成であり、第 3 章「レズビアン／ゲイの歴史」と第 4 章「トランスジェンダーの誤解をとく」を置き、第 1 章から第 4 章までを、クィア・スタディーズについて述べるまでの「準備編」（森山 2017: 11）とする。
- 19) 同特集では、「男女いずれも自認しない人々の「恋愛的／性的惹かれの語りにくさ」を論じたもの（武内 2021）や不可視化されがちな「ポリアモリー」や「クワロマンティック」、「アセクシュアル／アロマンティック」について論じたもの（中村 2021; 深海 2021; 松浦 2021）がある。
- 20) 『クィア・スタディーズ '96』や『クィア・スタディーズ '97』では、「異性愛」や「ヘテロセクシュアル」という視座から性をめぐる諸規範を問いなおす論考が掲載されている（色川 1996; 木谷 1997; 富岡 1997）。
- 21) 島袋海理は、これまで不可視化されてきた、同性愛者が同性愛社会において恋愛を

めぐる諸規範を内面化する「恋愛への疎外」という概念を提案する(鳥袋 2021)。そして、「恋愛への疎外」は同性愛者と異性愛者とで共通する生きづらさであると、両者が語り合い、連帯する可能性を述べる(鳥袋 2021: 38)。

## 引用・参考文献

- Ahmed, Sara, 2016, *An Affinity of Hammers*, *TSQ*, 3(1-2): 22-34.
- 飯野由里子, 2008, 「『クィアする』とはどういうことなのか?」『女性学』15: 78-83.
- , 2019, 「トランスジェンダー差別がフェミニズムの問題でもある理由」『女たちの21世紀』(98): 37-40.
- , 2020, 「フェミニズムはバックラッシュとの闘いの中で採用した自らの『戦略』を見直す時期にきている」石川優実編『エトセトラ』4: 85-8.
- 伊野真一, 1997, 「Queer Studiesの射程」クィア・スタディーズ編集委員会『クィア・スタディーズ'97』七つ森書館, 106-19.
- , 2001, 「構築されるセクシュアリティ——クィア理論と構築主義」上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房, 189-211.
- , 2005, 「脱アイデンティティの政治」上野千鶴子編『脱アイデンティティ』勁草書房, 43-76.
- 井上輝子, 2002, 「女性学 women's studies」井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納実紀代編『岩波 女性学事典』岩波書店, 211-4.
- 色川奈緒, 1996, 「『異性愛』を『自覚』する」クィア・スタディーズ編集委員会『クィア・スタディーズ'96』七つ森書館, 66-77.
- ヴィンセント、キース, 1997, 「誰が、誰のために?」『現代思想』25(6): 8-17.
- ヴィンセント、キース/風間孝/河口和也, 1997, 『ゲイ・スタディーズ』青土社.
- ウェイス、ジル、金城克哉訳, 2006, 「Trans studies トランス・スタディーズ」ジョー・イーディー編, 金城克哉訳『セクシュアリティ基本用語事典』明石書店, (Weiss, Jill, 2004, "Trans studies," Jo Eadie ed., *Sexuality: The Essential Glossary*: Arnold. )312.
- 大橋洋一, 2002, 「クィアに視れば——それがなにをもたらしたのか」『大航海』(43): 102-9.
- , 2003, 「〈キーワード〉解説」竹村和子編『“ポスト”フェミニズム』作品社, 198-9.
- , 2005, 「専門性の構築と脱構築」『ジェンダー史学』1: 15-22.
- 尾崎日菜子, 2019, 「エイリアンの着ぐるみ」『女たちの21世紀』(98): 11-6.
- 掛札悠子, 1992, 「『レズビアン』である、ということ」河出書房新社.
- 風間孝, 1997, 「クィアはどこからきたか——クィア・セオリーにおける理論と実践」動くゲイとレズビアンの会『別冊 id 研——創刊予告・上期』, 10-35.
- , 2008, 「特集にあたって バックラッシュをクィアする——性別二分法批判の視点から」『女性学』15: 4-7.
- 風間孝・河口和也, 2010, 『同性愛と異性愛』岩波書店.

- 加藤秀一, 2008, 「ジェンダー論の練習問題 第33回『クィア』について」『解放教育』38(1): 100-2.
- 釜野さおり, 2011, 「人口学とクィア・スタディーズ」『人口学研究』47: 25-35.
- 河口和也, 2002, 「ゲイ・スタディーズ gay studies」井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納実紀代編『岩波 女性学事典』岩波書店, 106-7.
- , 2003, 『クィア・スタディーズ (思考のフロンティア)』, 岩波書店.
- , 2010, 「テーマ別研究動向 (クィア・スタディーズ)」『社会学評論』61(2): 196-205.
- , 2018, 「クィア・スタディーズの視角」風間孝・河口和也・守如子・赤枝香奈子『教養のためのセクシュアリティ・スタディーズ』法律文化社, 191-206.
- 川坂和義, 2010, 「ゲイ・スタディーズにおける『当事者』の言説の特徴とその問題点」『論叢クィア』(3): 86-109.
- , 2019, 「書評 菊地夏野・堀江有里・飯野由里子編著『クィア・スタディーズをひらく1 アイデンティティ、コミュニティ、スペース』」『女性学』27: 82-6.
- 菊地夏野・堀江有里・飯野由里子, 2019, 「クィア・スタディーズとは何か」菊地夏野・堀江有里・飯野由里子編『クィア・スタディーズをひらく1 ——アイデンティティ, コミュニティ, スペース』晃洋書房, 1-14.
- 木谷麦子, 1997, 「塔のある風景——〈ヘテロセクシュアル〉を巡る私論」クィア・スタディーズ編集委員会『クィア・スタディーズ'97』七つ森書館, 209-23.
- 坂田和子, 2001, 「『家族の問題』を語りはじめよう」『生活指導』(573): 8-13.
- サラモン、ゲイル, 藤高和輝訳, 2019, 『身体を引き受ける——トランスジェンダーと物質性 (マテリアリティ) のレトリック』以文社. (Salamon, Gayle, 2010, *Assuming a Body: Transgender and Rhetorics of Materiality*: Columbia University Press.)
- シニョリレ、ミケランジェロ, 川崎浩利訳, 1997, 『クィア・イン・アメリカ——メディア、権力、ゲイ・パワー』現代書館. (Signorile, Michelangelo, 1993, *Queer in America: Sex, the Media, and the Closets of Power*: Random House.)
- 島袋海理, 2021, 「恋愛からの疎外、恋愛への疎外——同性愛者の問題経験にみるもう一つの生きづらさ」『現代思想』49(10): 31-8.
- 清水晶子, 2019, 「つながりの希求は何を求めてきたのか」北海道大学大学院文学研究科応用倫理研究教育センター『公開シンポジウム「『LGBT』はどうつながってきたのか?」記録』12-22.
- , 2020a, 「埋没した棘——現れないかもしれない複数性のクィア・ポリティクスのために」『思想』(1151): 35-51.
- , 2020b, 「フェミニズムの思想と『女』をめぐる政治」伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留編『世界哲学史8 ——現代 グローバルの知』筑摩書房, 101-21.
- スパーゴ、タムシン, 吉村育子訳, 2004, 『フーコーとクィア理論』岩波書店. (Spargo, Tamsin, 1999, *Foucault and Queer Theory*: Icon Books.)
- セジウィック、イヴ・コゾフスキー, 上原早苗・亀澤美由紀訳, 2001, 『男同士の絆——イギリス文学とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出版会. (Sedgwick, Eve

- Kosofsky, 1985, *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*: Columbia University Press.)
- , 外岡尚美訳, [1999]2018, 『クローゼットの認識論——セクシュアリティの20世紀 新装版』青土社. (Sedgwick, Eve Kosofsky, [1990]2008, *Epistemology of the Closet*, new ed.: University of California Press.)
- 武内今日子, 2021, 「恋愛的／性的惹かれをめぐる語りにくさの多層性——『男』『女』を自認しない人々の語りを中心に」『現代思想』49(10): 39-49.
- 田代美江子・渡辺大輔・長香織, 2014, 「ジェンダー・バイアスを問い直す授業づくり——『性の多様性』を前提とする中学校の性教育」『埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要』(13): 91-8.
- 田多井俊喜, 2018, 「クィア理論とトランスジェンダー——性的差異について」『京都社会学年報』(26): 51-61.
- 田中玲, 2006, 『トランスジェンダー・フェミニズム』インパクト出版会.
- , 2008, 「クィアと『優先順位』の問題」『女性学』15: 46-9.
- 富岡明美, 1997, 「あるヘテロフェミニストの心象風景」クィア・スタディーズ編集委員会『クィア・スタディーズ'97』七つ森書館, 181-8.
- , 2002, 「レズビアン・スタディーズ lesbian studies」井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納実紀代編『岩波 女性学事典』岩波書店, 486-7.
- 富永貴公, 2015, 「社会教育・生涯学習研究とジェンダー」津田英二・久井英輔・鈴木真理編『社会教育・生涯学習研究のすすめ——社会教育の研究を考える』学文社, 185-94.
- ラウレティス、ド・テレサ／ヴィンセント、キース／新美広, 1998, 「クィアの起源——レズビアンとゲイの差異を語ること」, 風間孝／キース・ヴィンセント／河口和也編『実践するセクシュアリティ——同性愛／異性愛の政治学』動くゲイとレズビアンの会, 66-78.
- ローレティス、ド・テレサ, 大脇美智子訳, 1996, 「クィア・セオリー——レズビアン／ゲイ・セクシュアリティ イントロダクション」『ユリイカ』28(13): 66-77. (Lauretis, de Teresa, 1991, *Queer Theory.: Lesbian and Gay Sexualities; An Introduction, Differences*, 3(2): iii-xviii.)
- 永田麻詠, 2020, 「性の多様性を包摂する国語教育と批判的リテラシーの検討——クィア・ペダゴジーを手がかりに」『関係性の教育学』19(1): 193-203.
- 中村香住, 2021, 「クワロマンティック宣言——『恋愛的魅力』は意味をなさない!」『現代思想』49(10): 60-9.
- 中村美亜, 2008, 『クィア・セクソロジー——性の思いこみを解きほぐす』インパクト出版会.
- 日本女性学会ジェンダー研究会, 2006, 『Q & A 男女共同参画／ジェンダーフリー・パッシング——バックラッシュへの徹底反論』明石書店.
- Halperin, David, 2003, *The Normalization of Queer Theory: Journal of Homosexuality*, 45: 339-43.
- 深海菊絵, 2021, 「ポリアモリーという性愛と文化——愛をいかに自由に実践するか」『現



代思想』49(10): 50-9.

伏見憲明, 1996, 『クィア・パラダイス——「性」の迷宮へようこそ 伏見憲明対談集』  
翔泳社.

———, 2003a, 『同性愛入門——ゲイ編』ポット出版.

———, 2003b, 『変態(クィア)入門』筑摩書房.

伏見憲明・野口勝三, 2004, 「対談『ゲイという経験』をめぐる」伏見憲明『増補版  
ゲイという「経験」』ポット出版, 9-41.

藤高和輝, 2019, 「訳者解説」, ゲイル・サラモン『身体を引き受ける——トランスジェ  
ンダーと物質性(マテリアリティ)のレトリック』以文社, 341-65.

———, 2020, 「『性別違和』とは何か?——トランスジェンダー現象学の導入に向  
けて」稲原美苗・川崎唯史・中澤瞳・宮原優編『フェミニスト現象学入門——経験か  
ら「普通」を問い直す』ナカニシヤ出版, 115-26.

藤森かよこ編, 2005, 『クィア批評』世織書房.

星乃治彦, 2006, 「ゲイ・レズビアン・スタディーズとクィア理論」『ジェンダー史学』2:  
81-3.

堀あきこ, 2019, 「分断された性差別——『フェミニスト』によるトランス排除」『女た  
ちの21世紀』(98): 6-10.

堀川修平・富永貴公, 2019, 「パートナーシップを鍛える性の多様性教育実践の視点—  
—同性間のパートナーシップ制度を持つ自治体の社会教育・生涯学習政策の検討か  
ら」『都留文科大学研究紀要』89: 109-33.

前川直哉, 2019, 「女性同性愛と男性同性愛、非対称の百年間」菊地夏野・堀江有里・  
飯野由里子編『クィア・スタディーズをひらく1——アイデンティティ, コミュ  
ニティ, スペース』晃洋書房, 81-101.

松浦優, 2021, 「アセクシュアル/アロマンティックな多重見当識=複数的指向——仲  
谷鳩『やがて君になる』における『する』と『見る』の破れ目から」『現代思想』  
49(10): 70-82.

眞野豊, 2020, 『多様な性の視点でつくる学校教育——セクシュアリティによる差別を  
なくすための学びへ』松籟社.

マリイ、クレア, 2008, 「大学におけるクィア・スタディーズの意義」日本教育学会関  
東地区『日本教育学会2007年度関東地区研究活動報告書 教育学 meets クィア・ス  
タディーズ——〈大学教育とクィア〉に関する諸課題を考える』, 1-10.

三橋順子, 2019, 「日本のフェミニズムが問われるもの——トランスフォビアの克服と  
トランス女性との連帯」『女たちの21世紀』(98): 17-21.

村山敏勝, 2005, 『(見えない)欲望へ向けて——クィア批評との対話』人文書院.

本山央子, 2019, 「特集にあたって」『女たちの21世紀』(98): 4-5.

森山至貴, 2009, 「クィア・ペダゴジーという問題系」『論叢クィア』(2): 49-70.

———, 2017, 『LGBTを読みとく——クィア・スタディーズ入門』筑摩書房.

———, 2018, 「空中から鳩を取り出す——クィア・ペダゴジーに関するノート」『ジェ  
ンダー研究21』8: 49-60.

山口恭平・田口賢太郎・松本郁恵・関根宏朗, 2011, 「『異質な他者』との共生に向けて

——セクシュアリティの多様性の考察から』『東京大学大学院教育学研究科紀要』  
51: 21-39.

吉田和子, 1997, 『フェミニズム教育実践の創造——〈家族〉への自由』青木書店.

ルベイ、サイモン、伏見憲明監修、玉野真路・岡田太郎訳, 2002, 『クィア・サイエ  
ンス——同性愛をめぐる科学言説の変遷』勁草書房. (LaVey, Simon, 1996, *QUEER  
SCIENCE: The Use and Abuse of Research into Homosexuality*: MIT PRESS.)

渡辺大輔, 2015, 「学校教育をクィアする教育実践への投企」『現代思想』43(16): 210-7.

——, 2019, 「教育実践学としてのクィア・ペダゴジーの意義」菊地夏野・堀江有  
里・飯野由里子編『クィア・スタディーズをひらく1——アイデンティティ, コミュ  
ニティ, スペース』晃洋書房, 134-65.

渡辺大輔・楠裕子・田代美江子・長香織, 2011, 「中学校における『性の多様性』理解  
のための授業づくり」『埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』(10):  
97-104.

Received: October 26, 2021

Revision received: November 30, 2021

Accepted: December 02, 2021